

丁寧体過去形式「～ましたです」の動向 — 「国会会議録」過去 72 年分のデータから— 神作晋一

日本語の文末丁寧体形式には「～ます」「～です」の 2 形式があり、過去形式は「～ました/～でした/～かったです」となっているが、「具体的なケースについて、確かにそのような事件ありましたですね。」のように「～ましたです」となる言い方がある。これは通常規範的な形ではなく一般の言語研究でもあまり取り上げてはいないが、日本語の文末表現の変遷や日本語学習者の習得過程に現れている現象である。本研究では「～ましたです」について、話し言葉を考えるという意図で、「国会会議録検索システム」(<http://kokkai.ndl.go.jp/>、以下「国会会議録」)から抽出した用例(昭和・平成・令和の 72 年分)を用いて種々の条件(前後接語、話題、場面、話者など)ごとの観点から使用実態について、調査・分析・考察することを目的としたものであり、以下のような知見を得た。

1. 「国会会議録」に出現する「～ましたです」は昭和 40～50 年代が平均で 200 例弱と一番多く、平成の期間も年間で平均 100 例くらいとなっているが、最近 10 年は減少傾向にある。
2. 前接語では、敬語や敬語相当に現れることが多いが、どの動詞や形式にも現れ、またその出現の割合は年代を通じてほぼ一定である。
3. 後接語では、終助詞、接続助詞などのつく例が多く、引用節に出ることは少ない。「よね」「かね」のような確認要求をする表現が増えていく一方、「終止」「がね」「から」などが減って、より丁寧な話し方になる傾向がある。

その他、同じ敬語でも尊敬語>丁寧語>謙譲語になること、同じ話者が繰り返している傾向であること、また同じ「です」が付く「～ませんです」と使用者が重なっていること、などがある。これらは「～ました」が多く使われているとそれだけでは十分でないと感じられるようになったため、さらに「～です」を付けるということ、あるいはとにかく「です」を付加しなければ丁寧ではないという意識があるということ、どちらも考えられる。